

令和5年度 第1回美術館運営協議会会議録

1 日時

令和5年8月3日(木) 午後1時 00分～午後2時 25 分

2 開催場所

豊田市美術館講堂

3 出席者

〔委員〕

正村 美里、高橋 綾子、鈴木 早紀恵、近藤 かおる、宮崎 健司、伊藤 一廣、
加納 里美、吉留 亜弥、木下 翔、茂木 明子（以上10名）

〔事務局〕

森 泰通、高橋 秀治、田境 志保、北谷 正雄、塚田 恵理子、鈴木 俊晴、成瀬 美幸、
松田 吉範、大柳 良輔（以上9名）

4 会議の経過

事務局から森室長及び高橋館長のあいさつ、交代委員紹介、美術館職員紹介、関係法令の概要について説明した。

その後、委員の互選により、会長に正村委員を選出、会長が高橋委員を職務代理者に指名した。その後、会長あいさつ、傍聴人の報告(1名)、出席委員の報告(10名)を確認し、本会議が成立することを宣言。議事録署名人として、会長自らを含む2名(高橋委員)指名した。続いて、令和4年度の実績を報告した後、各委員からの意見を聴取した。

5 会議内容

事務局(北谷、鈴木、成瀬、松田)

(1) 展覧会の実績報告について

- ・資料 3 により、令和4年度の実績について説明
- ・資料 4 により、「ねこのほそ道」の実績について説明
- ・資料 5 により、「徳富満 テーブルの上の宇宙」の実績について説明
- ・資料 6 により、「新収蔵品展」の実績について説明

会長

ただいまの報告についてご意見やご質問をお聞きしたい。

委員

博物館と美術館の学校活用ガイドを作成するために、美術館から協力を得ることができ感謝している。教職員向け研修会として、美術館と連携し、複数の学校の小中学生が来館し、鑑賞プログラムの実施ができたことは大きな収穫だった。今後もこのような研修があれば、多くの教職員が美術館を知ることができると感じた。

豊田市で育つ子ども達には、豊田市の宝である美術館の作品をデジタルではなく実体験で体験し、そのサイズ感や質感に感動してほしいと思っている。さらに、その感動を仲間と共有できる取組をガイドボランティアも交えながら行えたことに感謝している。今後もそのような活動を実施できれば良いと思っている。

福島県立美術館でプライス・コレクションを鑑賞した際、子どもの目線の高さに作品に対する深い鑑賞を促す説明カードが飾っており、素晴らしい取組だと感じた。

委員

コロナ禍からの脱却、というキーワードが印象に残っている。交流館も地域住民が集う場であるが、今までコロナによって活動できなかったことが、いよいよ脱コロナとなり交流館館長として頑張ろうと思う。美術館運営についても同様に、様々な思い、仕掛けなどが考えられたと思う。授乳室に描かれたドローイングは非常に温かみを感じるもので、美術館が豊田市民にとって居心地の良い空間でいて欲しい。

委員

美術館の催し物について、目標設定はどのように決めているのか。

事務局

具体的な数値の設定としては、観覧者数を目標としている。

委員

観覧者数の他にも、「美術館を利用して心地良い気分になれる」など、数値として出てこない目標もあると思う。その目標に向けて、もっと美術館を PR していく必要があると感じる。私自身、美術館を利用したことが1度しかない。アンケートの中に催し物の情報を記載し再度の来館を促すなど、工夫をしてほしい。

委員

コロナ禍は樹木自治区として大きな活動ができなかった。脱コロナということで、どのように区民と向き合い何に取り組んでいくかを試行錯誤している。

年報を見て、樹木自治区に近い童子山小学校や朝日丘中学校の生徒が美術館に来館していることを知った。大人としても、負けないように様々なことを勉強していきたい。

委員

豊田市美術館については開館前から関心があり、陰ながら応援してきた。豊田市美術館の魅力が増しているのは、学芸担当の成熟、成長が大きな要因であると思う。また、開館当時から比較すると経済的に裕福な豊田市というイメージから、大きく社会情勢が変わっている。おそらく豊田市美術館でも、収集費や収蔵スペースなどの問題が出てきていると思うし、そのような課題に対し中・長期で計画をしながら取り組んでいるのだと推測している。

豊田市美術館の展覧会に対して感じることは、固定化した現代美術のイメージではなく、社会や世界の問題を意識した企画を実施しており、他の公立美術館では現代美術の企画展がや

りにくい面がある中で、素晴らしいことだと思う。特に徳富満展について、若い年齢で亡くなった作家の作品を評価することは難しいことだが、愛知県美術館と共同で企画が実現したことは、しっかりしたスタンスの学芸員とマネジメント体制の賜物だと感じる。徳富氏は冴えた視線で多くの作品を残しているが、早逝すると作品が失われがちになるにも関わらず、愛知県美術館と共に棲み分けされて作品が収蔵されたことは、今後の研究面でも大きな収穫である。

学生の教育実習で保見中学校に伺った。生徒の4割が外国籍で、多層な子ども達が豊田市から育っていくことを実感した。また、「第60回 豊田市民美術展 記念展 After Prize－豊田の美術」の冊子では、豊田の美術史が丹念に紹介されていた。その歴史の中で、美術館が地元にもどのように寄与していくかを考えると、将来豊田から優れたアーティストが出てくることも想定される。年報を見ると、子ども達に影響を与えるべく、多くの取組があることを実感し、とても心強く感じた。

委員

私自身も保見中学校の出身だが、ブラジルなど中南米出身の生徒が多い。美術館ウェブサイト、研修、通常の来館などで、言葉の壁がある層へどのように対応していくのか教えてほしい。

事務局

ウェブサイトは日本語がメインで、他に英語、韓国語、中国語2種類で作成されている。いま、ウェブサイトの改修を検討しており、その際にポルトガル語等の表記を組み込むことも選択肢のひとつになると思うが、最近は自動翻訳の精度が高いので、必ずしも特定言語のページを作らなくとも対応できるかもしれない。

展示室内での来館者への対応については、現状であまり手が付けられていないが、ガイドボランティアの中に英語が堪能な者が複数おり、将来的には外国語を話者とする方向へのイベント、また少し話がそれるが、目が不自由な方などに向けたワークショップなどを視野に入れている。

委員

マンパワーだけでなく、IT の力を借りて解決して欲しい。

委員

「お庭でマルシェ」を企画した際に、普段は美術館に来ない方がマルシェで買い物をしたついでに展覧会を鑑賞したケースも散見された。また、出店者が「ねこのほそ道」展のステッカーを配布した際には、それを機に他のデザインのステッカーを集める方が出たり、SNS でねこまんじゅうの PR をしたりと、普段と違う切り口で美術館の広報をしていて、親しみやすさをアピールできていると感じた。一方でアンケートに「展覧会であまり猫を見られなかった」という意見も出たが、それに対しても今後展覧会名で工夫していくということなので、普段美術に関心がない層へも様々な切り口で来館に向けた仕掛け作りをして欲しい。また、隣に博物館がオープンするので、協力できることがあればさせていただきたい。

委員

市民割引について、豊田市内在住で70歳以上の方は観覧料が無料になる制度はどれだけ告知されているのか疑問を感じる。来場者の層を見ても70歳以上の来場者が数字として表れていない。暑い季節なので徒歩で来館は難しいにしても、自家用車で来館は可能だし、豊田市として力を入れているソーシャル・インパクト・ボンドに絡めたPRなど、市が行っている施策と関連した広報をすれば、祖父母と孫が来場するなど効果が表れると思うので、検討してほしい。

委員

「ねこのほそ道」展について、猫が見られると思ったのに見られなかった、市税が無駄に使われている、という厳しいアンケートの意見があり、私の知人でも残念だったという声も聞く。しかし、それも含めて展覧会の特徴だという気もする。ただ、ポスターに可愛い猫が描かれているので、癒しを求めて来館した方もいると思う。ポスターのデザインはどういった経緯で作成され、どんな層に向けたものなのか。

事務局

メインビジュアルは出品作家である佐々木健氏によるもの。ポスターやチラシで展覧会の内容を言葉だけで伝えるのは難しいので、いかにビジュアルで伝えるかを考え、美術好きだけではなく広い層に向けた、より広報効果の高いデザインとした。

委員

良くも悪くもポスターと展示の内容に乖離があると感じた。豊田市美術館に期待している人は多いと思うので、そういった乖離は少なくした方が良く思う。

その他、アーカイブによる講演会等の配信は講堂の収容人数を超える方に見てもらえるので、続けてほしい。ただ、講演会の開催をもっとPRする必要があると感じており、例えば、建築の講演会なら建築を専攻している学生や大学関係者などを招待すれば面白いと思うし、そこから客層が広がっていくのではないか。

美術館公式 YouTube に「吹けば風」展の紹介動画があがっているが、ウェブサイト、SNS の中で見つけやすいようなレイアウトにしてほしい。また、YouTube のコメント入力が可能になっているが、展覧会を未鑑賞の人に内容が知られないようにするためにも、コメント入力をオフにする方がよいのではないか。

今後も、旧来の美術ファンが離れないように、現代美術等とバランスの取れた企画を実施してほしい。

委員

授乳室の件については、こちらの声を真摯に受け止めてくださり、本当に感謝している。展覧会ごとに実施しているアンケートの目的、用途を教えてください。

事務局

展覧会ごとの来館者の傾向をつかむことと、生の感想を聞くことが目的である。

委員

「ねこのほそ道」展の来館者が約 20,000 人に対し、アンケート回答者が約 400 名と約 2%の回答率となる。ということは98%の来館者の声を拾えておらず、回答の内容が偏っているのではないか。回答率を上げていくためには、紙ではなくQRコードから読み取り回答できる形式にすれば、集計・分析も楽になり、生の声を拾い改善する、というサイクルが上手く回るのではないか。

事務局

統計学的な観点から申し上げると、来館者数が 10 万人までであれば 380 人分のアンケートを回収できれば有効なデータとなる。また、スマホから回答する方法も実施している。美術館としても、より多くの来館者の声は聞きたいという気持ちは持っている。

委員

スマホから回答する方法があることを知らなかった。会場の隅にあるアンケートボックスに気付いた人が書く方法だけでなく、回答したら特典があるなどインセンティブを設定すればよいのではないか。

また、美術館の発信力を高めていくという意味でも、来館者が SNS で美術館のハッシュタグを付けて投稿すると特典がもらえる、といった仕組みを作っても良いと思う。

会長

これまでの意見を聞いて、どの委員も豊田市美術館の強力な応援団であることを実感した。また、様々な視点からの意見も貴重なものだった。

私自身、岐阜県美術館の運営に携わっており、ウェブサイトの外国語表示など手が回らない点多々あるが、自動翻訳の機能を用いればウェブサイトのみならず、展示室に表示する解説等の多言語化する手法も変わってくると思う。

アンケートについては、ウェブで回答できない層の意見を拾うためにも紙媒体をなくすことはできないと考えている。また、ネガティブな意見の方がアンケートには反映されやすいので、「ねこのほそ道」展ではそのような意見が結果的に目立つことになったのではないか。また、全国で猫の展覧会がたくさん開催されている中で、豊田市美術館らしい切り口で企画が実現したのは学芸員と事務方の努力によるものだと思う。

他に、全体を通して意見があれば挙手願いたい。

委員

国際的な発信力を高める、という点で外国からの来訪客がスムーズに美術館まで行けるような取組みが必要。例えば、電車内で美術館のアナウンスを外国語で流す、セントレアから美術館までストレスフリーに移動できるなど、広域的に各所と連携する必要がある。

また、デジタルアートが普及していくことが予想される中で、海外からデジタル空間でアートを鑑賞できる美術館の分館のようなものを設立することも検討してほしい。

横浜美術館のコレクション鑑賞アプリ「みるみるアート きみはだれ？」では作品の理解を深め、問いを立てながら鑑賞することができるが、そのような鑑賞方法は社会人、学校関係者等

にも必要だと思うので、この様なアプリの開発を関係者も巻き込んで行うと面白いと思う。

会長

以上で協議事項を終了する。

会議録署名者

会長 正村 美里 ⑩

委員 高橋 綾子 ⑩